

薬物乱用が子どもたちに広がっています。

薬物乱用が低年齢化しています。その背景には、シンナーや覚醒剤、大麻などの薬物が簡単に手に入るようになってきていること、「一度くらいなら害はない」「個人の自由だ」という薬物乱用の危険性に対する誤解や罪悪感の希薄化があるとされています。

事例1

高校2年生のA子は、成績も優秀で、進学校に進学し、中学校からやっていたテニス部に入り順調な学校生活を送っていたが、先輩とのいざこざから、退部してしまった。

一種の挫折感から、勉強もはかどらなくなり、ストレス解消と言いながら、夜遊びを繰り返し、いつしか中学時代の友人とクラブに出入りするようになり、夜通し踊り明かしたり、時には酒を飲んだりするようになった。

ある日、クラブで知り合った仲間から、覚醒剤を持ち出され「これをやれば、すごい気持ちいいし、痩せられるよ」と言われ、周りのノリと覚醒剤を進めてきた仲間が異常にみえなかったことから、覚醒剤を注射してもらい、たちまち虜になって

しまった。

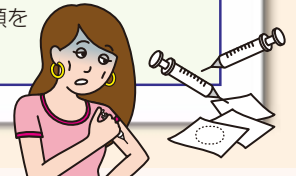
やがて、学校にも通わなくなり、やがて仲間と共に逮捕され、学校を退学することを余儀なくされた。

母親の後日談

覚醒剤をしていることを麻薬取締官から聞き、正直、今まで私はどこで育て方を間違ったのだろうとその言葉ばかりを頭の中で繰り返しております。

テニス部で挫折をした際に、親の甘さで、放任をし過ぎたことを今とでも後悔しております。

娘は初犯ということで、社会復帰をすることができましたが、まだ娘に笑顔を見せることができません。



薬物乱用の魔の手はどの子どもにも伸びてきます。

育ち盛りの子どもの薬物を乱用すると、その一生がだめになることがあります。また、これは重大な犯罪です。友人や周囲の影響を受けやすい子どもに対して、このような薬物の危険から身を守るように教育するのは、大人の責任です。

事例2

高校1年生のB男は、学校に対して熱中できるものもなく、漠然とした大人へのあこがれから友人に誘われるがままに日々夜の街に繰り出すという生活を送っていた。

すでに、喫煙経験があったB男は、友人から「依存なんてしないし、タバコより体に悪くないよ」という友人の一言と、法律で禁止されていることはわかっているが、強い好奇心と、いつでも止められるという甘い考えから、大麻を吸うようになった。

そして、大麻の多幸感が忘れられず、いつしか携帯電話を使って大麻を購入するようになった。

当然学校には行かなくなり、自宅で大麻を隠し持っていたことから逮捕された。

父親の後日談

子供が隠れてタバコを吸っていたことはうすうす知っており、部屋から妙な匂いもすることもあったので、ひよっとすると禁止されている薬物をやっているのではないか、という疑いももっておりました。しかし、当時の私は「私の息子は薬物は絶対にやらない」という根拠のない思い込みを信じ込んでしまいました。

今では、なぜ自分達、家族の力で止めさせられなかったのか、という後悔でいっぱいです。息子が戻ってきたら、家族で支え合い依存と向き合っていきたいと考えております。

